



Title	多和田葉子研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	袁, 嘉孜
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第15993号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92380
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Chia-Zu_Yuan_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 袁 嘉 孜

学位論文題名

多和田葉子研究

・本論文の観点と方法

芥川賞作家の多和田葉子は、長年ドイツに住み、ドイツ語・ドイツ文化全般の薫陶を受け、日独両語で活躍する作家である。本論文は、多和田の文芸様式を、その渡航体験との関わりについて追究するものである。多和田の作品は、在独の日本人留学生や日独翻訳・通訳に従事する在独日本人を主人公とするものが多い。先行研究では、多和田の言語体験を踏まえ、作品におけるこれらの人物や物語に着目して、言葉や文化の垣根を越えようとする越境性について検討されてきた。本論文はその観点を発展させ、テキストの構成そのものを対象としてこの越境性を論じるものである。テキスト構成における越境性とは、外部から他のテキストを導入しつつ、新たなテキストを構成する第二次テキスト生成の手法を指す。多和田のテキストは、日本だけでなく、ドイツを始めとする西洋や、ひいては世界文学をも視野に入れ、常に複数のテキストを〈借用〉して新たに作られるのである。

これに関して、多和田自身は、長編評論『エクソフォニー 母語の外へ出る旅』において、「母語の外に出た状態一般」を指すエクソフォニー (exophony) の概念を提起し、母語/母国語ではない言葉で書かれた文学作品を一括りにして、エクソフォン文学として解釈し直した。多和田文学とは、ドイツ語と日本語との二つの系統に則った理解を基盤としつつ、翻訳・変換・統合の作業を経てテキストを言葉遊びのように構築し、多様な意味での越境者の物語に高い幻想性を与えることにより、エクソフォニーの概念を繰り返し実践したものである。その意味で、多和田の日本語のテキストは、母語・母国語で書かれた越境文学と言える。本論文はその本質と諸相を、ジュネットの『パランプセスト』の理論などを基盤とし、作品に即して解明したものである。

・本論文の内容

本論文は序論・結論の外、全三部八章から成る。内容は概ね一九八〇年代末から一九九〇年代までの多和田文学の第二次テキスト作品群を辿る構成となっている。序論では、エクソフォン文学・第二次テキスト・翻訳など、多和田文学の基本的な見取り図を描いて、本論文の展望を行った。

第I部では、第二次テキスト論の枠組において、多和田の作品様式の輪郭を描き出した。第一章では『うるこもち / *Das Bad*』を取り上げ、母語の外に出た状態を体現する「私」の変身譚を読み直す。作品中で、「蛇」のイメージ～日本神話の人身御供の話～日本民話の異類婚姻譚と変身モチーフ～ギリシア神話のペルセウス・アンドロメダ型の物語の系列が、順次、主人公「私」の変身譚と繋ぎ合わされる。日独通訳の仕事に従事する「私」を通してエクソフォニーの問題が語られ、東西にまたがる複数のテキストを横断する構成においても、多和田文学の越境性が見出されると論じた。第二章では、『文字移植』を対象として、第二次テキスト的手法としての〈借用〉(to adopt) の概念を検討し、引用・転移・アダプテーションなど複数のイペルテキスト的实践(ジュネット)を通して構成されるテキストのあり方を分析して、多和田の翻訳観を論じた。『文字移植』では、ドイツ語作家ドゥーデンの作品「アルファベットの傷口」(*Der wunde Punkt des Alphabets*, 1998) の〈借用〉を通して、「わたし」の翻訳の成果が示される。ここにも多和田文学の越境性が認められる一方で、パロディやアダプテーションとも近いが、元の要素を大きく変化させることのない〈借用〉として論じた。以上の二章で解明した多和田文学におけるイペルテキスト性やその身体性は、以後の作品においても変容しつつ継承されるのである。

第Ⅱ部では、小説作品におけるおける言葉と身体の関係を検討し、多和田の小説言語のメカニズムを究明した。第三章では『ペルソナ』を取り上げ、顕著な皮膚感覚の描写が取り込まれた作品として論じている。移民小説で多く見られるアイデンティティの問題に対する答として、能面と役者の身体との関係という場において、越境的で複合的なアイデンティティの生成と認識に辿り着いた主人公の道子を分析した。道子は、各々の登場人物との関係の中で、戸惑いつつも個人と集団との関係を見定め、能面と自らの身体との関係において、自分を言い表す言葉を手に入れたと描かれる。この作品では、能の作法を〈借用〉して生まれるアイデンティティの新たな可能性が提示されていると見なす。第四章では、口頭での情報流布と、口承による民話の伝承との原理の類似性に着目し、『犬婿入り』と複数の犬婿入り伝承との比較を行った。伝承を多層的に継承するイペルテキスト的实践の観点から、噂（伝承）の場としての団地に注目し、露骨な身体的描写によって、伝承に本来含まれる異質性・異物性を確保しようとする物語論的志向が見出されるとした。第五章では、スイスにおける鉄道旅行を通じて、観光客としての在独日本人による西洋への眼差しを描き出す『ゴットハルト鉄道』を論じている。この作品は最初ドイツ語で書かれた紀行文であったが、日本語化される際に、小説の体裁に変えられ、幻想性の高い表現が多く付け加えられた。ドイツ語の語彙や言い回しの分析的な織り込みにより、身体的な比喩表現が顕著に認められる。旅は本来、身体的移動・地理的移動として、見る・触るという身体感覚と深く関係する。この作品では、蛇と林檎のイメージを軸として複数のテキストが導入され、それを含む身体的表現によって、作品を一種の建国神話に近づける仕掛けとして機能するものと論じている。

第Ⅲ部では、ここまでで定式化したエクソフォニー・身体・イペルテキスト的实践などの要素を、多和田文学とドイツ民話との関係において検討する。特に多和田の「ふたくちおとこ」は、テキスト構成において、ドイツの民話「オイレンシュピーゲル」、多和田の戯曲「ティル」と深く絡み合っている。オイレンシュピーゲルの物語とその人物像を巧妙に〈借用〉した結果として、「ティル」と「ふたくちおとこ」は、中世の民衆的祝祭の表象様式を介して、言葉のメカニズムを最大限に極めることに至ったのである。それに伴い、中世の民衆本の借用によって、多和田文学における身体性が新たな様相を見せたことを、第六章、第七章の分析で明らかにした。第八章では「ふえふきおとこ」を取り上げ、グリム兄弟の『ドイツ伝説集』に収録された「ハーメルンの子供たち」に基づき、とりわけイペルテキスト的实践としての「増幅」（ジュネット）の手法を用いて作り上げられたものとして論じた。バフチンが規定した中世のグロテスク・リアリズム的な観点を借りて言えば、「ふえふきおとこ」の身体的描写は、最終的に物語を変身と再生に導く多和田文学における物語論的志向につながっていくと分析した。

結論においては、以上の第二次テキスト分析を通して明らかとなった、多和田文学におけるディスクールの特性をまとめた。そのような特性は、ストーリー性が豊富で、かつ言葉のイメージの無限連鎖過程によって意味が拡散し、多義的に解釈しうる物語が次々と新たに生まれ変わることを裏づけるものである。その意味で、多和田が提唱したエクソフォン文学は、言語表現の方法と構造を最大限に重視する理論であると考えられる。最終的に多和田の文学作品を、このエクソフォン文学の枠組において多彩な可能性を提示し、移民文学・越境文学のカテゴリーに大きな一石を投じたものとして評価している。